

# 物語としての新聞記事の日英比較\*

——日本語と英語の物語構造と好まれる言い回し——

多々良 直 弘

## Abstract

### The Analysis of the sports News Stories in English and Japanese

Naohiro Tatara

The aim of this paper is to analyze the structure of sports news stories. Bell (1991) compares the narrative structure of the news stories in English with the narrative structure of personal experience analyzed by Labov & Waletzky (1967) and Labov (1972). In this paper, through the analysis of the narrative structure of English and Japanese newspapers, I will present the view that English and Japanese narratives are characterized as result-oriented and process-oriented, respectively.

## 1. はじめに

本稿の目的は日本語と英語の新聞報道の構造を比較分析することである。Bell (1991) は Labov & Waletzky (1967)、Labov (1972) が提唱する物語 (語り) の構造をもとに、新聞記事の構造を分析している。Bell は英語のメディア報道のテキスト構造を分析し、対面コミュニケーションで伝達される物語の構造と新聞記事の構造を分析し、両者の構造の差異を明らかにしている。井上 (1995) では日本とアメリカの野球報道の新聞記事を「言語化するという行為自体が文化的行為である」という前提のもと、日英語で何が言及され

るのかということと比較分析し、文化独自のテキスト構造があることを示している。ここでは日英語における新聞報道のテキスト構造の分析を通じて、過程志向的・無界的な日本語と結果志向的・有界的な英語の特徴が記事の構造にも反映されていることを明らかにしていきたい。

## 2. 個人による語りの構造と新聞記事の構造の比較

Bell (1991) は語りとしての新聞記事の構造を分析している。Bell の分析は Labov & Waletzky (1967) と Labov (1972) が分析している対面コミュニケーションで行われる個人的な語りの構造と新聞記事の構造を比較したものであるが、個人の語りと新聞報道では同じ特徴が現れる場合もあるが、前者には必要不可欠な要素であっても、後者では必要ない要素が存在することを指摘している。Labov & Waletzky (1967)、Labov (1972) が提唱した語りの構造は (1) にある 6 つの要素から構築されているが、それぞれの要素の特徴と Bell (1991) の分析を概観してみたい。

### (1) Labov & Waletzky (1967)、Labov(1972) の物語構造

- ① Abstract
- ② Orientation
- ③ Complicating action
- ④ Evaluation
- ⑤ Result or resolution
- ⑥ Coda

①の abstract は物語における中心的な行動や要点をまとめたものである。この abstract は個人の語りにおいては選択的な要素であるが、新聞報道においては必須の要素である。この abstract は新聞報道においては headline と lead によって構成されている。lead は記事の最初の段落において記事の要点をまとめたものであり、記事の構造において必要不可欠な要素である。headline は lead においてまとめられた要点を更にまとめたものである。②の orientation は物語のはじめに、その物語がどのような場所や状況で起きたの

か、登場人物は誰なのかを同定する役割を果たしている。③の *complicating action* は物語の中で何が起こったのかということの説明する中心部分である。個人の語りにおいては、基本的に時間軸に沿って各出来事の説明がなされるが、ニュース報道では原因よりも結果が先に述べられるなど、必ずしも時間軸に沿った報道がされるわけではない。④の *evaluation* は、物語の重要性を述べる箇所であり、語り手がなぜこの物語が伝えられる価値があるのかを説明する箇所である。つまりこの *evaluation* で語り手は方向性のない文章構成(取り留めのない話)から、意味のあるまとまりの物語を区分するのである。ニュース報道においてもこの *evaluation* は必要不可欠なものであり、報道される出来事の重要性を示すものである。⑤の *resolution (result)* と⑥の *coda* は語りを完結させるための要素であるが、*resolution* は最終的に何が起こったのかを述べる機能を果たしている。一方で⑥の *coda* は物語の最後に言われる *and that was that* という発話のように、語りが終わった後物語のコンテキストから現在のコンテキストに戻すためのものである。Bell (1991) によると新聞報道においては出来事の最終的な結果は記事の最後に言及されるのではなく、記事の最初の部分である *abstract(lead)* において記述される。また *coda* はその性質上新聞記事には必要ない。つまり、*coda* は物語の終わり方の一つの方法であり、その他の参加者にフロアを渡したり、個人的な経験を話す物語の中ではその事態を経験した時から物語を伝えている時へと移行させる役割を果たしており、このような役割は新聞報道には必要ないのである。

### 3. 日英語における新聞記事の構造比較

前章で見たように Bell(1991) は英語の新聞報道を Labov & Waletzky (1967)、Labov(1972) において指摘されている物語構造と比較分析したわけであるが、本章では日本語と英語のスポーツ報道の記事におけるテキスト構造の比較を行いたい。言い換えれば、これまで様々な研究者において日本語と英語の物語構造の違いが指摘されてきたが、本章では Bell が分析した英語の新聞報道の特徴が日本語の新聞記事においても観察されるのかどうか

という点をスポーツに関する新聞記事をもとに検討していきたい! スポーツというものには必ず何かしらの試合結果が伴うためにメディアがその結果を読者に伝達することは義務であるが、その結果を報道する方法が日本語と英語の新聞で異なることがある。本章ではまず Bell (1991) が新聞報道では必須であると述べている abstract(headline と lead) の表現方法と英語の新聞報道では選択的な要素もしくは不要な要素である resolution と coda が日本語の記事に現れるのか否かということを通じて、日英語の記事の構造を比較してみたい。

### 3.1 新聞報道における headline と lead の日英比較

語り手が物語を伝えるとき、まず最初にその物語の主要部と全体像を明確にする abstract が必要となる。この物語の abstract の部分は、新聞記事においては headline と lead により構成されているが、Bell (1991:150) は報道における headline と lead の特徴を以下のように述べている。

Press news has headlines as well as lead paragraphs. The headline is an abstract of the abstract. The lead pares the story back to its essential point, and the headline abstracts the lead itself.

このように記事の中で最初の段落にあたる lead は読者を報道される物語の要点に導く役割を果たし、headline は lead をさらに要約する役割を果たしている。Bell は新聞記事の headline と lead の特徴を (2) を例に挙げ説明している。

#### (2)US troops ambushed in Honduras

UNITED STATES troops in Honduras were put on high alert after at least six American soldiers were wounded, two seriously, in a suspected leftist guerrilla ambush yesterday, United States officials said.

(2) はホンジュラスで起きた事件に関する記事であるが、まず headline においては米兵が待ち伏せされ、攻撃されたこと (ambushed) が強調されてい

る。これに続き、最初の段落である lead において米兵が負傷した点とそれに伴い発令された警戒について述べられている。

### 3.1.1 headline の特徴<sup>2</sup>

日本語と英語のヘッドラインの特徴は多々良 (2007a, b) ならびに多々良・八木橋 (2007) に詳しいが、英語のヘッドラインの特徴は原因と結果の論理的関係を明記し、曖昧性を残さない因果志向的な特徴がある一方で、日本語のヘッドラインでは個人のプレーのみに焦点が当てられたり、試合結果や因果関係を明記しないことがある。

英語の特徴としては他動詞文による表現が最も好まれる。以下の (3)、(4) はチーム対チームによる他動詞文、(5) と (6) は個人がチームに与える影響を他動詞文で表現したもの、(7) は無生物主語を使用した表現である。また (8)(9) にあるように主節で個人の活躍に焦点を当てた場合であっても、その後接続詞を用いて試合結果全体との論理的な関係が明記されている。

- |   |                            |
|---|----------------------------|
| (3) Czech Republic Pounds U.S.                    | <i>(The Japan Times)</i>   |
| (4) Kyuden pulls the plug on Waseda.              | <i>(The Daily Yomiuri)</i> |
| (5) Becks Bends Ecuadorians.                      | <i>(The Daily Yomiuri)</i> |
| (6) Robben powers Dutch to vital win.             | <i>(The Daily Yomiuri)</i> |
| (7) Jaidi's late strike earns Tunisia a point.    | <i>(The Daily Yomiuri)</i> |
| (8) Villa nets pair as Spain thrashes Ukraine.    | <i>(The Japan Times)</i>   |
| (9) Aoki heats up as Japan beats Australia again. | <i>(The Daily Yomiuri)</i> |

このように英語では他動性が高い表現、もしくは因果志向的な表現が好まれるが、それとは対照的に、日本語では他動詞文はほとんど使用されない。英語ではチームが相手チームに対して、もしくは個人がチームにどのような影響を与えているのかが明記される一方で、日本語では (10)(11) にあるように試合結果ではなく個人のプレーのみが言及されたり、(12) のようにどちらかのチームに対する言及のみのことがある。また日本語の新聞のヘッドラインでは (13) にあるように見出しが点在されており、それらの関係が明記され

ていない。また同じ紙面に勝者に関する内容のみでなく、敗者に関する内容も併記されることがある。つまりこれは結果を導いた直接的な原因を見出しにするというよりも、その試合の中で起きた(顕著な)ことを単に記述しているのみであり、そこからどのような因果関係があるのかを読者に読み取ることを期待するということを意味する。このような表現方法は、多々良(2007a)で指摘しているが、池上(2006)が挙げている節と節の論理関係を明記しない俳句のレトリックと類似していると言える。

- (10) 33歳ジャベル「伝統」速攻弾 (『読売新聞』)
- (11) 新戦力播戸2発 代表初ゴール 中村豪快ゴール (『読売新聞』)
- (12) ワセダ 初戦散る (『読売新聞』)
- (13) 「見方のパス信じ全力疾走」徹底 チェコ、連係会心 ロシツキー2  
発 主軸ドノバンシュートなし (『朝日新聞』)

### 3.1.2 lead の特徴

ここまで見てきたとおり、英語では *headline* で結果そして原因と結果の論理関係を明記する一方で、日本語ではそれらを明記しないことがある。それでは物語の *abstract* に相当するもうひとつの要素である *lead* について見てみたい。(14)と(15)ならびに(16)と(17)はそれぞれ同じサッカーの試合に関する記事の英語と日本語の第一段落である。

- (14) England played poorly once again and won, but Sven Goran Eriksson's men are unlikely to get away with anymore woeful performances such as this one if they are to reach the World Cup final. (*The Japan Times*)
- (15) やっと気持ちよくゴールを狙える。ベッカムはそう思っただろう。後半15分、ゴールはやや左、約25メートルの絶好の地点でFKのチャンスが訪れた。前半に2度、得意の地点でFKを得たが、守備陣の壁が邪魔だった。ボールから9.15メートル離れる規則より明らかに近い。しつこく主審に講義しないのは、英国紳士のプライドか。最初はシュートをあきらめてパスに変更し、2回目は失敗した。

(『朝日新聞』)

- (16) England labored to an unconvincing 1-0 win against Paraguay in its Group B opener in Frankfurt on Saturday.

(*The Japan Times*)

- (17) 「就任以来、最強のチームに仕上がった。1ヶ月間のお祭りをお楽しみいただきたい。」イングランドのエリクソン監督は試合前日、半ば優勝宣言をしている。普段は懐疑的な英メディアも監督のことばに乗った。40年ぶりのW杯優勝に向け、メディアを含めた総与党体制で、初戦を迎えた。スタートは最高だった。前半3分、ベッカムの左サイドからのFKが鋭く弧を描きながらゴールへ向かう。

(『朝日新聞』)

上述したとおり、lead は記事の第一段落において物語の要点や全体像を説明する箇所である。(14)の英語のテキストではイングランドが不調ながらも勝利を収めたことが述べられているが、(15)の日本語のテキストではleadが本来伝えるべき要点ではなく、試合の現場に臨場している語り手が推測した選手の心情が述べられている。(16)と(17)も同様に同じ試合に関する記事であるが、(16)では試合結果に関する要約がなされているが、日本語のテキストでは試合以外の情報の後に、得点シーンの状況説明が行われている。

日本語ではleadが伝えるべき新聞報道において最も重要であると考えられる試合概要が省略されていたり、本文の第一段落ではなく、紙面別の場所に書かれているという特徴が見られる。このように、日本語の新聞報道は読者に結果がある程度共有されていることを前提とした物語構造になっている一方で、英語の報道ではそのような前提に立つておらず、可能な限り解釈にあいまい性を残さないよう因果関係を明記する傾向にある。そのため英語の見出しでは、試合の結果とその原因を明記する表現方法がとられることが多いが、日本語では結果ではなく、一方のチームのみに言及したナル的な表現や試合の中における個人のプレーが注目を浴びることがある。このような物語構造の違いはHinds(1987)の指摘する日本語の読み手責任と英語の書き手責任という特徴が反映されていると言えるだろう。

また、(15)のように選手の心情を描写したり、(17)のように試合状況を描写する日本語の特徴は、認知主体である語り手の視点の取り方に密接に関わっていると考えられる。池上(2006)や本多(2005)が指摘するように、日本語のテキストが主観的把握に基づいて構成されており、読者に共感を求めるようなレトリックが好まれる。一方で英語の好まれる言語表現や小説などにおける事態描写は客観的描写が好まれると言われる。

このような言語表現の傾向(志向性)は、認知主体である語り手の視点の取り方と密接に関わっている。つまり事態を言語化する際に、認知の主体が事態をどのように把握するかにより、言語表現に差異が生じるのである。図1にあるように池上(2007)は日本語では語り手の視点がオンステージに、つまりその場面に臨場する形で置かれ、その語り手の視点から物語が語られるのに対して、英語ではオフステージから定点的視点(God eye's view)で語られる傾向にあると指摘している。本多(2005: 154-5)も「英語は状況を外部から見て表現する傾向が比較的強いのに対して、日本語は状況の中において、その現場から見えたままを表現する傾向が強い」と述べている。この視点の取り方が日本語と英語の小説などの文章構成に非常に大きな影響を与えており、新聞報道においてもこの特徴が顕著に現れている。つまり英語では神の視点から事態を表現するためにアメリカ(英語)型の報道では客観的情報を提供し、日本語では認知の主体である話者が「事態の中に自らの身を置き、その事態の当事者として体験的に事態把握をする(池上、2007: 194)」ため記者の主観的、体験的な情報を提供するという特徴が生まれてきていると言えるだろう。

このような日本語と英語の記事の特徴は井上(1995)の野球報道の特徴と一致するということができるだろう。井上(1995)は「言語化するという行為それ自体が文化的な行為である」という前提のもと日本とアメリカの野球の新聞報道を比較している。井上(1995)が挙げている日英語の特徴的な違いの一つに、英語の記事には客観的な記録や結果に焦点(重要性)が置かれているのに対し、日本語では客観的な記録よりも、選手の心情などの精神面に関する言及や技術面への言及が多いと指摘している。この点は本章で述べ



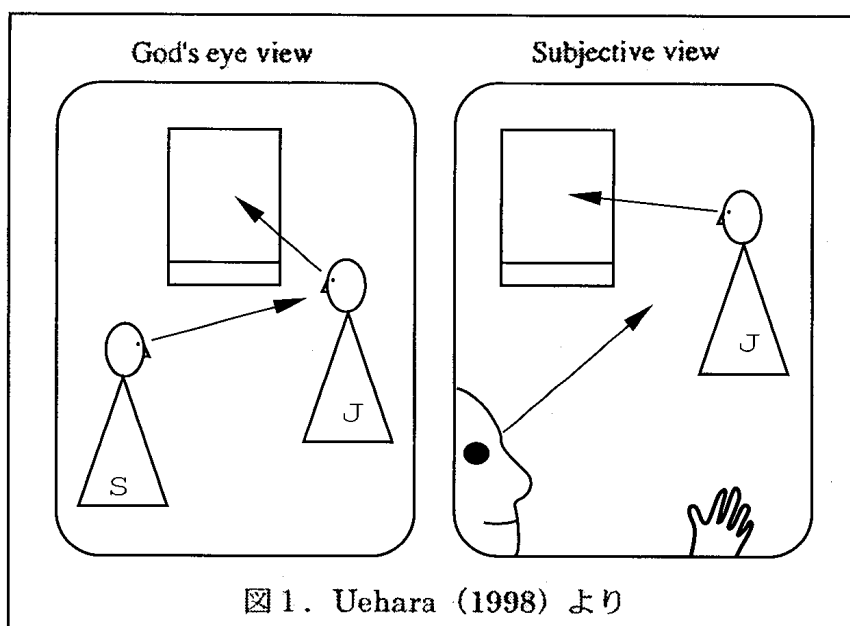


図1. Uehara (1998) より

た試合を臨場的に体験した記者の主観的な感想や推測により記事が構成されているという特徴と井上が指摘する日本型とアメリカ(英語)型の報道の特徴が一致しているということができよう。

池上(2006)は日本語と英語にはそれぞれ<主観的把握>と<客観的把握>としての好まれる言い回しが観察されることを指摘しているが、両言語の特徴が新聞記事の特徴にも顕著に現れていると考えられる。つまり英語では headline と lead の箇所で状況の外部から試合の客観的状況を描写する一方で、日本語では主観的把握に基づいた状況に臨場する語り手の視点から語られた記事構成が行われているということができるのである。

### 3.2 日本語の無界的物語構造と英語の有界的物語構造—新聞報道に coda はないのか

前節では新聞記事の headline と lead の特徴から日本語と英語のテキストの特徴を比較したが、本節では新聞記事の結論部分である resolution と coda に焦点を当て分析していきたい。Labov & Waletzky (1967)、Labov (1972) の対面コミュニケーションでの語りにおいて、resolution は最終的に出来事の中で何が起こったのかということ述べる結論を示す機能を果たしている。一方で coda は物語の最後に言われる *and that was that* などの発話のよ

うに、語りが終わった後物語のコンテクストから現在のコンテクストに戻すという機能を果たしている。Bell(1991)は新聞報道において resolution は概要を述べる abstract(headline ならびに lead) の部分に書かれ、記事の最後に現れることはないと述べている。coda に関しては新聞報道には客観的事実を報道するという新聞記事の目的から不要な要素であると指摘されている。

英語の記事では試合の概要の後、時間軸に沿った描写もしくは勝者、敗者の順で記述され記事が終了し、Bell が指摘しているように coda は存在しない。しかし日本語の記事では以下にあるように coda に相当するような表現方法で記事が完結する傾向が強い。

- (18) 得点源がいるだけに、これが勝ちパターンになるかもしれない。  
(『朝日新聞』)
- (19) 必ず打線も奮起する。きっと投打の歯車が再びかみ合ってくる。  
(『読売新聞』)
- (20) 十二回、会田が阪神・桜井に3ランを浴びたとはいえ、高橋由のヘッドスライディングや試合序盤からの攻守の数々など気迫あふれるプレーを展開した。この日のナインが明日へつながる何かは得た。そう信じるしかない。  
(『読売新聞』)
- (21) 4番がこのまま復調していけば、チーム状態も再び上昇気配に転じるはずだ。  
(『読売新聞』)
- (22) 「スタートが悪かったからこそ、できることがある」と、この日は故障で応援に回っていた中園主将。昨季の大学王者が、回り道をしながら成長を続けている。  
(『読売新聞』)
- (23) 周りに流されず、一つ一つ、階段を上がっていけばいい。  
(『朝日新聞』)

(18) から (23) は日本語の新聞記事に見られる典型的な終わり方である。このように日本語の記事では語り手の独話的な表現により終了することが多いが、これは 3.1 で述べたように、日本語のテキスト構造が主観的把握に基づき語り手が臨場的に感じたことや願望を独話的に述べるということと関連

していると考えられる。

またこのような「次へのつながり」や「継続性」を強調した表現は日本語の無界的な言語文化的特徴の反映であると考えられることができるだろう。つまり、英語では試合を完結した有界的なものとして捉える一方で、日本語では無界的なものとして捉えているということができ、この事態把握こそが日英語の談話構造に反映されているということができよう。

この日英語の無界的・有界的な談話構造は唐須(1988)が指摘している日本語と英語の物語構造とも一致する。英語(西洋)の物語では伝統的に、主人公が自分の意思で何かを行い、何かを成し遂げ(困難を乗り越え)、結果を創り出すことで物語が完結するという有界的な構造が一般的であるが、日本語の物語は主人公の意思と物語の展開に関係なく事態が推移していくのみであり、物語が新しい局面を迎えるのではなく、以前と同じ状態に戻ることが多い。

#### 4. 結論

本稿では日本語と英語の新聞報道における記事の比較を行い、両言語の談話構造を考察してきた。Labov & Waletzky (1967)、Labov(1972)の物語構造をもとに行われたBell (1991)の新聞記事の構造と対応する日本語の物語構造を比較すると、物語を構成する各要素の差異が観察される。本稿で分析の対象としたスポーツ報道に関して言えば、日本語においても英語においてもメディアが伝えなくてはならない最も重要なことは試合の結果であるため、両言語において共通点が多いためであるが、その結果を伝達する方法が日英語で差異が観察されることがある。英語ではheadlineとleadにおいて試合の要点ならびに概要を明記し、原因と結果の論理的関係が明記される。描写の際には認知主体は事態の外から客観的に事態を捉えるため、言及されるのは試合の中での記録や結果が中心となるのである。一方で日本語の記事の構造は、試合の客観的な結果などの描写ではなく、語り手である記者があたかも選手の視点に立って状況を記述をしたり、試合の現場に臨場する形で体験的な描写するという特徴が観察される。また英語の記事では対

象の試合を完結したものとして記述するのに対し、日本語の記事では完結したものではなく無界的なものとして、言い換えれば、次へのつながりを強調した談話構造が好まれる。このような新聞報道における好まれる言い廻しならびに物語構造は、これまで指摘されてきた英語の〈結果志向〉・〈有界性〉、そして日本語の〈過程志向〉・〈無界性〉という特徴と一致するといえることができるだろう。

## 注

\* 本稿は2007年11月9日に行われた第25回日本英語学会全国大会ワークショップ(『日本語と英語の〈過程志向〉・〈結果志向〉を再考する』における口頭発表を加筆修正したものである。本研究を進めるにあたり、唐須教光慶應義塾大学教授には非常に有益なコメントをいただいた。またワークショップに協力してくださった井上逸兵慶應義塾大学教授、共に行った信州大学花崎美紀氏、花崎一夫氏、立教大学谷みゆき氏、杏林大学八木橋宏勇氏にも非常に有益なコメントをいただいた。各氏に心より感謝申し上げたい。

<sup>1</sup> 本多(2005)、池上(1981、1992、2006)、井上(1995)、唐須(1988)、外山(1973)、など参照。

<sup>2</sup> headlineの統計的データに関しては多々良(2007a,b)、多々良・八木橋(2007)を参照。Bell(1991)はテレビのニュース番組ではヘッドラインが基本的にはないと述べているが、近年ではテロップの使用に伴い、文字情報によりヘッドラインを構成している。

## 参考文献

Bell, Allan. (1991) *The Language of News Media*. Oxford: Blackwell.

Hinds, John. (1987) Reader vs. Writer Responsibility: A New Typology. In Conner, U. and R. B. Kaplan eds. *Writing across Languages: Analysis of L2 Text. Reading*, 141–52. MA: Addison-Wesley.

本多啓. (2005) 『アフォーダンスの認知意味論』東京大学出版会.

池上嘉彦. (1981) 『「する」と「なる」の言語学』大修館書店.

- . (1992). 『詩学と文化記号論』 講談社学術文庫.
- . (2006) 『英語の感覚・日本語の感覚 <ことばの意味>のしくみ』 NHK ブックス.
- 井上逸兵. (1995) 「日米の野球報道にみる言語と文化の型」 『記号の力学』 pp.129-41. 日本記号学会.
- Labov, W. (1972) *Language in the Inner City: Studies in the Black English Vernacular*. Oxford: Blackwell.
- Labov, W. and J. Waletzky. (1967) “Narrative Analysis: Oral versions of personal experience”, in Helm, J. (ed.) *Essays on the verbal and visual arts*, 112-44. Seattle: University of Washington Press.
- 多々良直弘. (2007a) 「スポーツ報道のレトリック—スポーツはいかにして報道されているか—」 『紀要 桜美林英語英米文学研究』 第 47 輯. pp. 71-91. 桜美林大学.
- . (2007b) 『結果事態はどのように伝えられるのか——新聞報道に見る日本語と英語の好まれる言い回し』 日本英語学会第 25 回大会ワークショップ「英語と日本語の〈結果志向〉・〈過程志向〉を再考する」 配布資料.
- . (印刷中) 「スポーツ・コメンタリー——メディアが創るスポーツという物語」 『文化とコミュニケーション』 慶應義塾大学出版.
- . 八木橋宏勇. (2007) 「日本語と英語の原因と結果の表現方法—言語・認知・文化的構築物の相同性を求めて」 『言語と人間研究会春期セミナーハンドブック』 pp.31-32. 「言語と人間」研究会.
- 唐須教光. (1988) 『文化の言語学』 劉草書房.
- 外山滋比古. (1973) 『日本語の論理』 中央公論社.
- Uehara S. (1998) “Pronoun Drop and Perspective in Japanese.” *Japanese/ Korean Linguistics* 7: 275-289.